

雑報

変光星名が付けられた新星など

近着の IAU 変光星委員会から出版されている Information Bulletin on Variable Stars (IBVS) No. 1921 によると 1980 年までに命名・登録された変光星の総数は 28254 星で、本誌 1979 年 11 月号で紹介して以来 778 星が新たに追加されたことになる。それによると、赤外線カタログ (IRC) や、X線源カタログ (3U, 4U) などに含まれる星で、変光が認められるものについても変光

星名がつけられていて、その数も増加していることがわかる。下記は 1979 年 11 月号で紹介以後に新たに命名・登録された新星などである。* 印を付けた 2 星は新星ではないが、我が国で、古畑正秋氏によって観測され、新たに命名・登録された星である。

DV Cnc: 変光範囲 (実視) 10.0 等~11.0 等現
周期 約 110 日

BF CMi: 変光範囲 (実視) 10.3 等~11.1 等現
周期 約 1.18069 日

(香西洋樹)

	星	名	α (1950.0) δ	発見者	発見日
1.	SS 433	=V 1343 Aql	19 ^h 09 ^m 4 +04° 54'		
2.	IRC+10200	=DV Cnc	9 0.6 +08 24	Huruhata	
3.		=BF CMi	7 27.7 +04 38	Huruhata	
4.	Cen X-4	=V 822 Cen	14 55.3 -31 28		
5.	Cir X-1=3 U 1516-56	=BR Cir	15 16.8 -56 59		
6.	Nova Sgr 1978	=V 4049 Sgr	18 17.5 -27 58	B. Stenholm I. Lundström	1978 Mar. 8
7.	Ser X-1=4 U 1837+04	=MM Ser	18 37.5 +04 59		
8.	Nova TrA 1974=TrA X-1	=KY TrA	15 23.5 -61 49		
9.	Honda-Kuwano Object in Vul	=PU Vul	20 19.0 +21 25	M. Honda Y. Kuwano	1978 Aug. 21 1979 Apr. 5

書評

COSMOS (上) (下)

カール・セーガン 著・木村 繁 訳

(朝日新聞社, 1980 年 11 月刊, 上下各 1,400 円)

近年これほど話題になった天文書もなからう。すでに書評も数多く書かれおおむね好評のようである。

カール・セーガン博士はコーネル大学惑星研究所の所長であり、アメリカの惑星探査計画に指導的役割をはたしてきた。特に火星探査船ヴァイキングで、火星における生命探査に情熱を傾けたことは本書にも詳しく述べられている。パイオニアの宇宙人への手紙やヴォイジャーのレコード盤も彼が首謀者である。木星大気と同じ組成の大気の中で放電実験を行ない、種々の有機物ができることを確かめもした。コーネル大学は、プエルトリコ島にあるアレシボ電波観測所の 300 m 巨大アンテナの運営を委託されているが、彼の主張によりここから球状星団 M 13 に向けて暗号電波が発射されたことがある。

こうしたセーガン流が本書のいたるところに吹き出しており、それが本書の魅力でもあり鼻につく点でもある。まず本書を天文学の入門書と考えるのは不適當であろう。むしろ天文学の科学 (人文科学も含めて) 上の位置づけ (特に科学的) について述べた本と理解した

方がよい。科学史のエピソードも多く語られており、ある場合は興味深く読まれるが、冗長に感ぜられるところもある。

本書の内容は昨年 11 月上旬、ヴォイジャー 1 号の土星接近に先だってテレビ放映もされているのでご存知の方も多からう。ただし、本書は天文普及書としてはめずらしいほど図が少なく、テレビでは視覚にうったえるために異った構成にしたところも多い。想像の宇宙船 (あまり感心しなかったが) は本書にはまったく登場しないし、宇宙カレンダーも簡単な表があるだけだ。テレビの視覚的な美しさに惹かれた方は旺文社からビクチャー・ブック版 COSMOS (全 4 巻) というのが刊行されているのでそちらを参照されるとよい。

上下巻あわせて 13 からなる章では、題名も含めてテレビと同じである。1 章 (宇宙の浜辺で) は宇宙における地球の位置が語られ、エラトステネスが地球の大きさを測ったエピソードにもふれられている。2 章 (宇宙の音楽) は生命の誕生と進化について語られ、大気中の放電で有機物ができる実験も述べられている。ただし、人為淘汰の例としての平家ガニのエピソードはいわずもがなである。3 章 (宇宙の調和) は惑星の運動の話であるが、ケプラーに関するエピソードは大変おもしろく読めた。4 章 (天国と地獄) はツングース隕石が彗星であったという話から金星という地獄世界を紹介し、人類が

このまま地球を汚染してゆくと地球も地獄になると警告している。5章(赤い星の神秘)は火星探測の話で、本書中もっとも興味深く読める。6章(旅人の物語)は木星探測の話で、ここで上巻は終わっている。

7章(天のかがり火)は古代科学史の中での天文学が語られる。8章(時間と空間の旅)は相対論の話から恒星間飛行が語られるが、テレビで相対論をガモフ流に(光速を極端に小さくする)見せたのは大変おもしろかった。9章(星の生命)は恒星の誕生から死までを原子の世界から始めてブラック・ホールの向うの世界にまで言及する。10章(永遠のはて)は銀河の話から4次元の世界、宇宙論へと発展する。11章(未来への手紙)はくじらの海中通信のエピソードから人の頭脳の話になる。12章(宇宙人からの電報)はシャンボリオンのロゼッタ石の解説のエピソードから宇宙人の存在確率、異質文明との接触について語られる。13章(地球のために)は人類が核戦争から生き残るために科学のなすべきことは何かをアレキサンドリアの古代図書館の話のエピソードとして語りしめくくっている。

訳はセーガン博士に文才がありすぎるのか、苦勞のあとがうかがえるわりにすらすら読めるとはいかない。いづれにしても天文屋が訳したのでは手に余ることうけあい、科学普及書のあり方について一石を投じたことは確かである。(田中 済)

星座 12 力月

富田 弘 一 郎 著

(岩波ジュニア新書 24, 岩波書店, 昭和55年12月22日発行, 新書版, 256頁, 580円)

本書は、岩波ジュニア新書の一冊として、主に中学・高校生を対象に、各月ごとの星座を解説するなかで、天文の基礎的事項についても要領よく触れてある本である。その性格上、一気に読むというよりは、星座を眺めるたびに、対応する箇所を何度も読み返すのに適した本である。

著者の富田氏は、彗星・等の太陽系内微小天体の観測・研究と観測装置の開発に永年従事してこられており、このような本には打って付けの方と言えよう。直接お目にかかったのは、岡山天体物理観測所で一度あるだけだが、情熱的な話しぶりは、お年よりずっと若々しい印象を受けた。本書からも、氏の天文学に対する情熱が感じられる。ミスプリントもほとんど見られなかった。

本文は、大きく5つに分かれる。まず導入部で、星座の変遷や星の呼び方・等級・色等の、後の部分を読むのに必要な知識がまとめられている。次いで、冬(1~3月)の星座、春(4~6月)の星座、夏(7~9月)の星座、秋(10~12月)の星座の4つの部分で、各月ごとの星座が解説されている。解説は主に、星座の由来とそれに

まつわる神話、星座を構成する主な星の明るさ・色・固有有名から成っている。特色ある天体の話題にも随意触れている。その合い間に項を改めて、天文の基礎的事項について説明されている(例えば冬の星座の所では、うるう年・大気差・歳差・連星・白色矮星等)。

星座の解説から基礎的事項の説明へのつながりは無理がなく、スムーズに入っている。例えば、6月の星座の所では、梅雨の季節が始まり星座の見られない日が続く話や6月10日が時の記念日である話があった後、時刻の決定の説明に入るといった具合である。また、各月の星座の解説の導入文は、中学・高校生の生活にマッチしており、彼らに共感を持って読まれるであろう。

ただ、中学生にはやや理解しにくく、説明図を付けた方がよいのではないと思われる箇所(例えば、p.51の「北極星の高度=土地の緯度」の説明)がいくつか見られた。また、小さい星座の中には、バイエル符号の付いた星座の図がないか、あっても解説文からずっと離れたページにあるため、構成する星の位置関係がすぐにはつかめないうものがあつた。さらに、一等星の表や星座の表は、本文の途中に置くよりも、巻頭か巻末に置く方が見つけ易いのではないかと思つた。

しかし、説明はおおむね平易で分かり易い。中学・高校生はもとより、星座に関心を覚えた大人にとってもよきガイドとなるであろう。新書版であるので、携帯にも便利である。星座に疎い評者も、これからは旅行に持参するつもりである。(吉岡一男)

お 知 ら せ

宇宙科学研究所教官公募

1. 公募人員 教授3名
- 2,3. 所属部門及び内容

(1) 宇宙圏研究系: 赤外線天体物理学部門教授

主に飛翔体からの赤外線観測による天体物理学の研究。同研究系には、現在高エネルギー天体物理学第1, 第2部門があります。

(2) 太陽系プラズマ物理研究系: 磁気圏プラズマ物理学部門教授

惑星磁気圏の構造、ダイナミクス、及び惑星間空間に於ける粒子加速現象の研究、同研究系には、現在磁気圏電波科学部門があります。

(3) 惑星研究系: 惑星大気物理学部門教授

地球を含む惑星系の飛翔体による観測研究及び理論的研究。同研究系には、現在、超高層大気物理学部門、惑星大気計測学部門があります。

4. 着任時期 昭和56年度内の成る可く早い着任を希望。